

T

TUNING

S

PL

T

ALK

トライアル

牧原道夫が ターボを語る

ターボの世界では煮詰まったと思われる現在においても、最高の技術を生み出すために、常に努力を惜しまない。そんな姿勢が彼のチューニングには現れている。そして彼のところには、あふれんばかりのクルマが集まっている。人気、実力を十分に秘めた牧原道夫、チューナーとしての世界は今後もとどまるところを知らない。

■ 試行錯誤の繰り返しが 良いものを生み出す原動力だ

クルマとかかわりを持ち出したのが21のころ。まだまだL型のメカチューニングが全盛で、ターボといえば、やっと産声を上げた頃でしたね。

ターボといっても、インタークーラーすら存在していない状態で、それを取りつけるだけのEXマニと、ターボからINマニへのパイプが用意されている程度のbolt-onキットしかなかったですからね。だからメカチューニングの方がはるかに速かっ

た。ターボはそんなにパワーはいらないという人が好んで取りつけていました。過給圧自体を正確にコントロールするということすらできない状態だったので、エンジンがつぶれかけたら「リリーフバルブをもう少しゆるめるか…。」という程度のものでしたよ。すべてがそういう状態だったので、今から考えると、よくあんな原始的なことをしていたな！ というのが本音と言えるでしょう。

ほとんどが試行錯誤の連続で、なかなか良いものはできなかつたけど、その当時からターボそのものは、いずれ魅力的なものになると確信していましたね。いや、ひょっとしたら失敗の連続で、やや意地になっていたのかもしれないけど……。

正直言ってあの頃のターボは走らなかった。インジェクションが出だしの頃で、ソレックスの方が速かったです。インジェクションをソレックスに変えるついでに、ターボでも付けようかという感じの人も多かったくらいで、本当の走り屋はターボをつけなかつたですね。